レーニン選集

5

マルクス＝レーニン主義研究所訳

レーニン選集　第5冊　¥ 250.

1957年 9 月 15 日　初版発行
1958年 7 月 10 日　再版発行

訳　者　マルクス・レーニン主義研究所
レーニン全集刊行委員会

発行所　株式会社　大　月　書　店
東京都文京区本郷1の15
電　話 (92) 3091・7887
振替　東京 1 6 3 8 7

三晃印刷・田中製本

はしがき

一　この選集は、ソ同盟マルクス＝レーニン主義研究所編『レーニン二巻選集』をもとにし、同研究所と日本のマルクス＝レーニン主義研究所との意見でいくつかの論文を加除して編集したものである。

一　翻訳には現行版としてもっとも権威のある『レーニン全集』第四版を底本につかった。全集のどこに入っているかは各論文末にしめしてある。

一　原注は（1）（2）……でしめして各段落のつぎに、訳注は＊印をつけて人名注とともに巻末にかかげておいた。ただし人名注は、本文のなかではいちいち印をつけずに、一括してアイウエオ順に配列してある。なお、本文中〔　〕内の六号または六ポイント組の挿入は訳者による補注である。

一　訳文のなかで傍点がついている個所は原文ではイタリック体になっている。ゴシック体のところは原文では同様ゴシック体である。

一　訳出には全集刊行委員会の翻訳者団と校閲者団が責任をもってあたり、術語・用語・文体・字づかいの統一をおこなってある。

目次

論争問題　公然の党とマルクス主義者
一　一九〇八年の決定……七
二　一九一〇年の決定……一一
三　一九〇八年と一九一〇年の諸決定にたいする解党派の態度……一四
四　解党主義の階級的意義……一七
五　「公然の党のための闘争」というスローガン……二〇
六　……二四
革命的高揚……二八
二つのユートピア……三六
アジアの目ざめ……四一
後進的なヨーロッパと先進的なアジア……四三
民族問題についての論評
一　言語問題における自由主義者と民主主義者……四五
二　「民族文化」……四八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三　「同化主義」という民族主義のおどし……五二
四　「文化的民族的自治」……五九
五　民族の同権と少数民族の権利……六五
六　中央集権と自治……六九

民族自決権について

一　民族自決とはなにか？……七六
二　歴史的＝具体的な問題提起……八一
三　ロシアにおける民族問題の具体的特殊性とロシアのブルジョア民主主義的変革……八四
四　民族問題における「実際主義」……八九
五　民族問題における自由主義的ブルジョアジーと社会主義的日和見主義者……九四
六　ノールウェーのスウェーデンからの分離……一〇四
七　一八九六年のロンドン国際大会の決定……一一〇
八　空想家カール・マルクスと実践的なローザ・ルクセンブルグ……一一四
九　一九〇三年の綱領とその解消派……一二一
一〇　結　論……一三〇

大ロシア人の民族的誇りについて……一三五

社会主義と戦争（戦争にたいするロシア社会民主労働党の態度）

第一版（国外版）の序文……一四〇

第二版の序文……一四〇
第一章　社会主義の諸原則と一九一四―一九一五年の戦争……一四一
第二章　ロシアにおける諸階級と諸政党……一五八
第三章　インタナショナルの再建……一六四
第四章　ロシアの社会民主主義派の分裂の歴史とその現状……一七一
ヨーロッパ合衆国のスローガンについて……一七九
革命の二つの方向について……一八三
事項注……一八九
人名注……二〇二
解説……二一三

論争問題

公然の党とマルクス主義者

一 一九〇八年の決定

多くの労働者にとって、『プラウダ』*と『ルーチ』**とのあいだにおこなわれている闘争は無用なもの、よくわからないものとおもわれている。新聞の各号に見られる個々の、ときにはかなり部分的な問題についての論争的論文が、闘争の題目と内容についてまとまった考えをもたせてくれないのは、あたりまえである。ここから労働者の当然な不満が生じてくる。

ところが、闘争のもとになっている解党主義の問題は、当面、労働運動のもっとも重要な、もっとも緊要な問題の一つである。この問題にくわしく通じ、それについて明確な意見をもつことなしには、自覚した労働者であることはできない。自分の党の運命を自主的に解決したい労働者は、論戦が一目見ただけでは十分にわからなくとも、頭から論戦をはねつけないで、真剣に真実をさぐろうとするだろうし、やがて真実をつきとめるであろう。

どうやって真実をつきとめるか？　たがいに矛盾しあう意見や主張のあいだで、どう判断をくだすべきか？

どんな題目であれそれについてはげしい闘争がおこなわれているばあい、真実を立証するためには、論争者の声明だけにかぎることなく、自分で事実と文書をしらべ、証人の証言があるかどうか、そしてそれらの証言が信ずるにたりるかどうかを、自分で検討しなければならないということは、道理のわかる人ならだれでも理解するであろう。

いうまでもなく、これをやるのはかならずしも容易ではない。それよりは、行きずりのもの、耳にはいってくるもの、人々が「おおっぴらに」さけんでいるもの、等等を信じこむほうがはるかに「容易である」。だが、それで満足するような人物は、「軽い」、軽率な人間と呼ばれて、だれからもまともに相手にされないものである。ある程度自主的に苦労してみなければ、どんな重要問題についても、真実は発見できないのであって、苦労をおそれる人間は、真実を発見する可能性を自分からなくすものである。

だからわれわれは、この苦労をおそれずに、自主的に

検討し、諸事実、文書、証人の証言を発見しようと努力する決心をした労働者だけに訴える。

まず第一に、解党主義とはいったいなにかという問題が生じる。この言葉は、どこから出てきたのか、それはなにを意味しているのか？

『ルーチ』は言う、解党主義、すなわち党の解散、破壊、党の否認ということは、まったく悪意の作り話だ、と。これは、ボリシェヴィキ「分派所属者」がメンシェヴィキに反対して考えだしたことだ、というのである！

『プラウダ』は言う、全党は、四年以上にわたって解党主義を非難し、それとたたかっている、と。

どちらが正しいか？　どうやって真実を発見すべきか？

あきらかに、ただひとつの方法は、最近の四年間、つまり一九〇八年から、解党派が最後的に党から脱落した一九一二年までの党の歴史上の諸事実と文書をもとめることだ。

こんにちの解党派がまだ党内にいたこの四ヵ年こそ、解党主義の概念がどこから、どうやって出てきたかをしらべるうえで、もっとも重要な時期である。

ここから第一の、基本的な結論が生じてくる。それは、一九〇八―一九一一年の諸事実と党文書を避けたうえで解党主義を論じるものは、労働者にたいして真実をかくすものだ、ということである。

ではそれらの事実と党文書とは、いったいどんなものなのか？

なによりもまず――一九〇八年の十二月に発表された、党の決定である。労働者は、おとぎ話や作り話をつめこまれる子供のような扱いをうけたくなければ、自分の助言者、指導者、または代表者にむかって、一九〇八年の十二月に、解党主義の問題について党の決定*があったかどうか、そしてその決定は、要するにどういうことか？をたずねるべきである。

この決定は、解党主義にたいする非難と、解党主義はどういうものかという説明をあたえている。

解党主義とは、「現存の党組織を解消して」（すなわち、解散、破壊、廃止し、とりやめて）「ぜがひでも、すなわち党の綱領、戦術、伝統」（すなわち従前の経験）「をはっきり放棄するという代償をはらってさえもそれを合法性」（すなわち適法性、「公然の」存在）「の枠内での無定形の結合体にかえようとする、一部の党内インテリゲンツィアの試みである」。

四年あまりまえの、解党主義についての党の決定は、まさに右のようなものであった。

解党主義の核心はどこにあるのか、解党主義はどういう点で非難されているのか、ということはこの決定からはっきりとわかる。この核心は、「地下組織」の否認、それの解消ということにあり、地下組織をぜがひでも適法性の枠内での無定形な結合体ととりかえるところにある。したがって、党はけっして合法的（適法的）活動を非難しているのでも、それが必要であると強調することを非難しているのでもない。党は、古い党をなくしてなにかある無定形な、「公然」の、党とは呼べないようなものにかえようとすることを非難している、しかも無条件に非難しているのである。

党は、自分の存在をまもることなしには、また党を解消し廃絶しようとするもの、党をみとめないもの、党を否認するものと無条件に闘争することなしには、存在することができない。それはわかりきったことである。

なにかある新しい党のために、現存の党を否認するもの、こういう連中にたいしてはつぎのように言うべきだ、やってみるがいい、新しい党をつくってみたまえ、だが君は、古くからの、いまある、現存の党の党員であるわけにはいかない、と。これが、一九〇八年十二月に発表された党の決定の意味であり、そして、党の存在という問題については、これ以外の決定がありえなかったことは明白である。

解党主義が、背教、綱領と戦術の否認、日和見主義と思想的に結びついていることは、もちろんである。右に引用した決定の末尾は、まさにこの点を指摘している。しかし解党主義は、日和見主義であるだけではない。日和見主義者は党を、まちがった、ブルジョア的な道へ、自由主義的労働者政治の道へひっぱっていこうとするが、しかし、党そのものを否認しはしないし、党を解消しようともしない。解党主義は、党を否認するまでになった、そういう日和見主義である。党の存在をみとめないような人間をふくんでいたのでは、党は存在しえないことは自明である。また現在の条件のもとで地下組織を否認するのは、古い党を否認することだということも、これにおとらず明白である。

そこで、一九〇八年の党のこの決定にたいする解党派の態度はどうか？　ということが問題となる。

ここに、問題の急所があり、ここに、解党派の誠実さと政治的良心の点検がある。

党のそうした決定があったということ、それがとり消されてはいないということ、この事実は、気でもくるわないかぎり、彼らのうちのだれ一人として否定しようとはしないであろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ところがここで解党派は、あるいは問題を回避し、一九〇八年の党の決定を労働者にかくしておくことにより、あるいはこの決定はボリシェヴィキが通過させたものだとわめきたてることによって（ときにはこれに罵詈雑言をつけくわえて）、言いぬけをしようとする。

しかし、この罵詈雑言は、解党派の弱点をさらけだすにすぎない。メンシェヴィキが通過させた党の決定もある——たとえば、一九〇六年にストックホルムで採択された、公有化についての決定*である。これはひろく知れわたっている。多数のボリシェヴィキは、この決定に同意していない。しかし彼らの一人として、これが党の決定であることを否定するものはない。解党主義についての一九〇八年の決定も、まったく同様に、党の決定である。この問題についてのどんな言いぬけも、労働者をまよわせようとする願望を意味するにすぎない。

口先だけでなしにほんとうに党をみとめようとおもうものは、ここで、どんな言いぬけもゆるさないだろうし、解党主義の問題にかんする党の決定について、やがて真実をつきとめることであろう。この決定にたいして、一九〇九年以来、プレハーノフをはじめとしてすべての党維持派メンシェヴィキが賛成した。プレハーノフは、彼が発行する『ドネヴニーク』**その他多くのマルクス主義的出版物のなかで、党を解消しようとするものは党内にいることはできないと、幾度となく、しかもまったく明確に、説明したのである。

プレハーノフはメンシェヴィキであったし、今後もやはりそうであろう。だから、一九〇八年の党の決定がボリシェヴィキ的性格をおびているという解党派のおきまりの口実は、二重の意味で、まちがっている。

プレハーノフにたいする解党派の罵詈雑言が『ルーチ』または『ナーシャ・ザリャー』***の紙上に数多く見うけられるが、それが多ければ多いほど、それは解党派のうそを、さわいだり、わめいたり、物議をおこすことによって真実をぼかそうとする彼らの試みを、ますますはっきりと証明する。ときにはこういうやり方で、新米を一度で聾にすることもできようが、しかしそれでも労働者は自分で判断をくだし、すぐに罵詈雑言をはねとばしてしまうだろう。

労働者の統一は必要であろうか？　必要である。

労働者組織の統一なくして、労働者の統一が可能であろうか？　不可能なことは、明らかである。

なにが、労働者党の統一をさまたげているのか？　解党主義をめぐっての論争である。

だから、労働者は、自分の党の運命を自分で決定し、

党をまもりとおすために、これらの論争を検討しなければならない。

それへの第一歩には、解党主義についての党の最初の決定に通じることである。労働者は、問題を言いのがれようとか、わきにそらせようとかするいっさいの試みを排しながら、この決定をしっかりと知り、注意ぶかく考えてみなければならない。この決定をよく考えてみたならば、労働者はみな、解党主義の問題の核心がどこにあるのか、なぜこの問題がそれほど重要な、それほど「痛切な」問題なのか、なぜ四年以上にわたる反動時代を通じて、この問題が党に提起されているのかを理解しはじめるであろう。

つぎの論文でわれわれは、三年半ばかりまえに採択された、解党主義についての党のもう一つの重要な決定を考察し、そのあとで、問題の現状を明確にするもろもろの事実と文書にうつることにしよう。

二　一九一〇年の決定

第一の論文（『プラウダ』第二八九号）でわれわれは、現在の論争で真実をさぐりあてようとのぞむ労働者が知らねばならない第一の基本的な文書、すなわち解党主義の問題にかんする一九〇八年十二月の党の決定を引用した。

こんどは、同じ問題について、三年半まえの一九一〇年一月に採択された、もう一つの、それにおとらぬ重要な党の決定を引用し、考察することにしよう。この決定は、全員一致で採択されたので、特別な意義をもっている。すなわち、例外なしにすべてのボリシェヴィキが、ついでいわゆるフペリョード派*全部が、最後に（これがもっとも重要なことだが）例外なしにすべてのメンシェヴィキとこんにちの解党派が、それからまた、すべての「非ロシア人」（すなわち、ユダヤ人、ポーランド人およびラトヴィア人の）マルクス主義者が、この決定を採択したのである。

この決定のなかからもっとも重要な個所を、そっくり引用してみよう。

「ブルジョア反革命の時代の社会民主主義運動の歴史的情勢は、プロレタリアートにたいするブルジョア的影響の現れとして、一方では、非合法の社会民主党を否認すること、この党の役割と意義とを引きさげること、一貫した社会民主主義の綱領的・戦術的諸任務とスローガンとを不具化しようと試みること、等々を生みだすとともに、他方では、社会民主党の国会活動

と合法的可能性の利用とを否定し、これら両者の重要性を理解しないこと、一貫した社会民主主義戦術を現情勢の特殊な歴史的諸条件に適用する能力のないこと、等々を、不可避的に生みだしている。

プロレタリアートの階級闘争のあらゆる分野にわたって社会民主主義的活動を拡大し、ふかめることによってこの二つの偏向を克服し、これらの偏向の危険性を説明することは、こういう諸条件のもとでの、社会民主主義戦術のきりはなしがたい要素である*」。

この決定からはっきりとわかることは、三年半まえに、例外なしにあらゆる潮流に代表されたすべてのマルクス主義者が、全員一致で、マルクス主義的戦術からの二つの偏向をみとめなければならなかったということである。二つの偏向は、危険なものとみなされた。二つの偏向は、偶然でもなく、個々人の悪意によるものでもなくて、現在の時代における労働運動の「歴史的情勢」によるものとして、説明されている。

そればかりではない。全員一致の党の決定のなかでは、これらの偏向の階級的起源と階級的意義が指摘されている。なぜなら、マルクス主義者は、崩壊と分解とのからっぽで、無内容な指摘だけにとどめることはしないからである。多数の民主主義と社会主義の支持者の心中では、分解、不信頼、意気消沈、当惑が支配していることは、だれでも見ているところである。これをみとめるだけでは十分でない。混乱と分解の階級的起源はどういうものか、非プロレタリア層のあいだのどんな階級的利益が、プロレタリアートの友人のあいだに「混乱」をはぐくんでいるのかを、理解しなければならない。

そして三年半まえの党の決定は、この重要な問題に回答をあたえている。すなわち、マルクス主義からの偏向を生みだしているのは「ブルジョア反革命」であり、それらを生みだしているのは、「プロレタリアートにたいするブルジョア的影響」である、と。

では、プロレタリアートをブルジョアジーの影響にゆだねる恐れのある、これらの偏向とは、どんなものか？これらの偏向の一つ、「プペリョード主義」と結びつき、社会民主党の国会活動と合法的可能性の利用を否定することにある偏向は、ほとんど完全に消滅してしまった。ロシアでは社会民主党員のだれひとりとして、もはやこういうまちがった、非マルクス主義的な見解を説こうとするものはない。「プペリョード派」（アレクシンスキーその他をふくめて）は党維持派メンシェヴィキと肩をならべて、『プラウダ』で働くようになった。

党の決定のなかで指摘されたもう一つの偏向は、ほか

ならぬ解党主義である。これは、地下組織の「否認」、その役割と意義の「引きさげ」についての指摘から明らかである。最後に、われわれは、三年まえに公表され、しかもだれからも反駁をうけなかった、もっとも正確な文書――すべての「非ロシア人」のマルクス主義者とトロツキー（解党派としては彼らにまさる証人は想像することもできない）から出ている文書――をもっている。この文書は、率直につぎのように言明している。「決議に指摘された潮流――これとはたたかう必要がある――を解党主義と呼ぶことは、本質的にはのぞましいことである」……

要するにこれが、現在の論争を検討しようとのぞむものが、だれでも知っていなければならない基本的な、もっとも重要な事実である。すなわち、党は三年半まえに解党主義を、マルクス主義からの「危険な」偏向として、それとたたかう必要のある偏向、「プロレタリアートにたいするブルジョア的影響」をあらわす偏向として、全員一致でみとめたのである。

民主主義反対の気分をもち、一般に反革命的な気分をもったブルジョアジーの利益は、プロレタリアートの古い党の解消、解散を要求している。ブルジョアジーは、労働者階級の党の解消主義にむかうあらゆる思想を、極力おしひろめ、支持している。ブルジョアジーは、古い任務の否認という考えをまきちらし、これらの任務を「不具化し」、切りちぢめ、刈りこみ、去勢するために、また、プリシケヴィチ一派の連中の権力の基礎を断固として一掃するかわりに、これらの連中と和解または協定するために努力している。

解党主義というのは、これらのブルジョア的な否認と背教の思想をプロレタリアートのあいだへもちこむことである。

これが、三年半まえに党の全員一致の決定によって指摘された、解党主義の階級的意義である。まさにこの点にこそ全党は、解党主義のもっとも深刻な害悪と危険性を見ているのであり、労働運動にたいする労働者階級の自主的な（口先ではなく行動のうえで）党の団結にたいする、解党主義の破滅的な作用を見ているのである。

解党主義は、労働者階級の古い党を解消（すなわち解散、破壊）することであるだけではない。それはまた、プロレタリアートの階級的自主性を破壊し、ブルジョア思想によってプロレタリアートの意識を腐敗させることでもある。

われわれは、つぎの論文のなかで、解党主義にたいするこの評価をはっきりと説明しよう。その論文では解党

派の『ルーチ』のもっとも重要な議論が完全に引用されるはずである。だがここでは、いままで述べてきたことに簡単なしめくくりをすることにする。およそ「解党主義」などというのは作り話だというふうに事態をえがきだそうとする、一般に「ルーチ派」の、とくにエフ・ダンおよびポトレソフの試みは、『ルーチ』の読者がまったく事情に暗いのを当てこんだ、驚くべき欺瞞にみちたごまかしである。実際には、一九〇八年の党の決定のほかに、解党主義を労働者階級にとって危険な、破滅的な、プロレタリア的進路からのブルジョア的偏向とみる完全な評価をあたえた一九一〇年の、全員一致の党決定がある。党のこの評価を隠蔽または回避するのは、ただ労働者階級の敵だけである。

三　一九〇八年と一九一〇年の諸決定にたいする解党派の態度

このまえの論文（『プラウダ』第九五（二九九）号）、でわれわれは、プロレタリアートにたいするブルジョア的影響の現れとしての、解党主義にかんする全員一致の党決定をその言葉どおりに引用した。

この決定は、われわれの指摘したように一九一〇年一月に採択されたものである。こんどは解党主義などというものはなかったし、いまもないのだなどといまごろ断言する勇気をもっている解党主義者の行動を観察してみよう。

一九一〇年二月、当時発刊されたばかりの雑誌『ナーシャ・ザリャー』の第二号で、ポトレソフ氏は率直に書いた、――「まとまった組織された階層制度」（すなわち「機関」の階層または体系）「としての党は存在しない」、そして「組織された全体としてはもはや実際に存在していないもの」を、解消しようがない、と（『ナーシャ・ザリャー』、一九一〇年第二号、六一ページを見よ）。

これは、党の全員一致の決定後、一ヵ月してから、あるいは一ヵ月もたたないうちに述べられたことだ！

しかも一九一〇年三月には、同じポトレソフ、ダン、マルトィノフ、エジョーフ、マルトフ、レヴィッキーの一派を寄稿者とする解党派のもう一つの雑誌『ヴォズロジデーニエ』*は、ポトレソフ氏の言葉を強調し、これをわかりやすく解説した。

「解消させるべきものはなにもない、そして、――われわれ（すなわち『ヴォズロジデーニエ』の編集局）のほうからつけくわえて言おう――この階層制度を、

その古い、地下的な形で復活させようと夢みることは、まったく有害な、反動的空想であって、かつてはもっとも現実主義的であった党の代表者たちが政治的感覚を失ったことをしめすものである」と（『ヴォズロジデーニエ』、一九一〇年第五号、五一ページ）。

党はない、そしてそれを復活させようとするのは有害な空想である――まさに明白な、はっきりした言葉である。これは明白な、まっこうからの、党否認である。否認したのは（また否認するように労働者にすすめたのは）、地下組織を放棄し、公然の党を「夢みた」その人々である。

さらにその後、ペ・ペ・アクセリロードは一九一二年、『ネフスキー・ゴーロス』*（一九一二年第六号）でも、『ナーシャ・ザリャー』（第六号、一九一二年）でも、地下組織からこうして逃げることをまったくはっきりとおおっぴらに、支持した。

ペ・ペ・アクセリロードはこう書いた、――「このような事情のもとで、非分派性を説くことは駝鳥のような仕草を意味し、自他をあざむくことを意味する」。「分派としてまとまった形をとり結束をかためることは、党改革の、あるいはより正しくいえば党革命の支持者の直接の義務であり、緊急な仕事である」。

このように、ペ・ペ・アクセリロードは、党革命、すなわち、古い党の廃棄と、新しい党の樹立にはっきり賛成している。

一九一三年、『ルーチ』第一〇一号の無署名主張論文には、「あちこちの労働者のあいだには地下組織にたいする共鳴が活気づき、強まってさえいる」、これは「遺憾な事実である」と率直に述べられている。この論文の筆者エリ・セドフは、この論文が『ルーチ』戦術の支持者のあいだにさえ「不満を呼びおこした」ことを、自分でみとめている（『ナーシャ・ザリャー』、一九一三年第三号、四九ページ）。おまけに、エリ・セドフ自身の釈明は、またもや『ルーチ』の支持者――すなわち、アンの新しい不満を呼びおこしたほどのしろものであった。アンは『ルーチ』第一八一号紙上に、セドフにたいする反論を書いた。アンは、「地下組織はわれわれの運動の政治的定形化、労働者社会民主党の樹立にたいする障害物である」というような見方をセドフが容認したことにたいして、抗議している。アンは、地下組織がのぞましいものであるかどうかについて「あいまい」になっているエリ・セドフを、嘲笑している。

『ルーチ』の編集局は、アンの論文に長たらしいあとがきをつけ、そのなかでセドフに賛意を表し、アンは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com